

りょうてりょうあし 両手両脚を畳の上へと無造作に投げ出し、大鼾をかいて眠つていた漣の鼻腔を、甘い香りがふと掠める。

漂う香りに誘われるようにして意図せず瞼が開き、心地よい夢の世界は途端に現実の向こう側へと追いやられてしまった。

どうな夢であつたかなど目を開いた途端に忘れてしまつたが、唐突な覚醒を不愉快に感じたということは、少なくとも漣にとって、現実よりも居心地の良い世界だつたのだろう。

どうせいま目覚めたところでやる事もないのだと眉を寄せつつ、二度寝に備えて寝がえりを打つたのだが、漂うその甘さの中、想い人の気配が入り混じつている事に気が付いてしまつた。

「泊、帰ってきたのか！」

人に懐かぬ野良猫のような俊敏さで体を起こし、堪らず駆け出す。

中國からやつてきた青龍の化身と共に彼が任務へと出かけていつたは何日前だつたか。

どこかの館に巢食う悪靈を退治する事が目的だと主から聞

かされていたが、退魔を専門とする彼にしてはやけに手こずつているなどこの数日、やきもきとしていたのだ。

ようやく帰還したのかと漣が表情を輝かせたのも束の間

「……なにがあつたんだ、コレ」

待ち人は、あるうことか女の膝の上で麗させていた。

「あら、漣さん」

縁側にて、自身の露わになつた太腿へ狛を寝かせ、まるで子供を寝かしつけるかの如く仕草で彼の黒髪を梳いていた銀寿は顔を上げると、駆けつけてきた漣におつとりと微笑みながら人差し指をそつと艶やかな唇の前で立ててみせた。

「起こしたら可哀想ですわ。しばしの間、お静かに」

振り向いた銀寿の背後からそつと狛の顔を覗き込んでみる。

どうやら氣を失つてしているらしい。

凛々しい眉は苦々しげに寄せられており、顔面は蒼白、薄く開いた唇からは苦しげな呻き声と聞き取れない寝言が絶え間なく

零れ落ちており、随分と憔悴している様子であった。

銀寿曰く、任務先で青い作業服姿の巨人に屋敷内で散々と追い回され、心身ともに疲弊し切っているらしい。

ちなみに鼻腔を擦つた甘い香りの正体はどうぞ情けない姿を晒した狛を見かねた茶屋娘のねこが分けてくれた団子である。しかし、未だそれは手つかずのまま膝を貸す銀寿の傍らに所在なさげにただその匂いだけを辺りに漂わせていた。

「……変わった悪靈とやり合つてたんだな」
悪靈とは大体が世の理を覆す奇怪な姿や能力を備えているものだが、それにしても館に巢食う作業服姿の巨人とは妙な輩だと漣が首を傾げると、銀寿も同調するように小首を傾げ、戸惑いの滲んだ微笑を浮かべた。

「狛さんを抱つてきた蒼牙くんも随分と疲れていきましたから、手強い相手だつたんでしょうね」
どうやら彼は本丸に辿り着く前から既に意識を失っていたらしい。

腕っぷしが立つような男ではなかつたが、彼も陰陽師の端くれである。並大抵の悪靈ではとても敵わぬ程の靈力を持つているにも関わらず、ここまで疲弊するとは一体どんな強敵と対峙してきたのだと肝を冷やすにはいられなかつた。

「銀寿、そこ代われ」

が、しかし——どんな事情があるにせよ、想い人が他人の膝を借りて寝込むなど、心の狭い漣としては許容しかねる状況だ。

ずかずかと苛立つ足取りで銀寿の元へ歩み寄ると、その傍らに腰を下ろして胡坐をかき、意識を失つてゐる狛の頭をこちらへ寄こせと自らの膝を掌で叩いてみせた。

敏い女はその仕草ひとつで漣の心境を読み取つたらしく、なにやら奥地の悪い微笑をほんのりと口元へ浮かべたあと、わざとらしく肩を竦めながら促されるまま、狛の頭を引き渡す。

「残念ですわ。狛さんの可愛らしい寝顔もつと眺めていたかつたのですけれど」

連れを揶揄する為だけに、平気な顔をして心にもない台詞を口に

するこの女狐は相変わらず悔れない存在であると半ば感心しつつも、これ以上は関わり合いになるまいと彼女からまんまと奪つた狹の頭を自身の太腿へと乗せ、さてこれからは心ゆくまで

この寝顔を堪能するぞと未だ苦しげに歪められているその表情をじっくりと見下ろしてみる。

まぐらにしていた女の柔い太腿が、突如硬い筋肉に変わつたせいか、狹は寝心地悪そうにその眉を険しく顰めてみせると、収まりの良い場所を求めているのが、そもそも落ち着きなく身じろぎを始めた。

ああ、このままではきっとすぐに目覚めてしまうだろうな、と懸念した矢先、漣と揃いの紅化粧を施した瞼が薄く開き、月のかがやきとよく似た金色の瞳がこちらへと向けられる。

「まったく、お前つてば意外と贅沢な野郎だつたんだな。女の膝でしか眠れないっていうのかよ」

苦笑交じりに八つ当たりの言葉をぶつけてはみたものの、寝起

きの頭では未だ現況が把握出来ていないのか、寝ぼけ眼のまま狹はゆっくりと瞬きだけを繰り返している。

夢と現の境界を馳染ませるよう、ゆっくりと。

たつぶり時間を掛けた後、ようやく意識が覚醒を始めたらしい。

「……漣？」

落ち着いた声音が、ようやく自分の名を呼んでくれた。

「任務のこと、覚えてるか？ 蒼牙がお前を本丸まで抱えて帰つてきたんだとよ」

すると狹は逡巡の後、ようやく自らが置かれた状況に気が付いたようだ。

無事に清州へ帰りついた事に対する心からの安堵と恐らくは相当手強い相手と対峙したのであるう任務の過酷さが入り混じる複雑な表情を浮かべて、頭上の漣を眺め上げていた。

「あとで蒼牙君に謝らなければ……」

言いながらも、今はその気力がないのか、再び狹は力なくその瞼を閉ざしてしまうと、寝心地があまり良くないであろう漣の

膝の上に頭を預けたまま、溜息を一つ零してみせた。

申し訳ありません、しばらくこのまま横になつていても良いで

すか」

言わずもがな、大歓迎である。むしろ、それを求めて銀寿の膝から彼の身体を奪つたのだ——とは、とても白状出来ず、「俺の膝は高いぞ。それでも良いなら、いくらでも貸してやる」などと傲慢な物言いで、本音を覆い隠す事にした。

振り返ると、気を失つている豹に膝を貸していたはずの銀寿が障子の後ろへ身を隠すように立つてゐるではないか。

「どうしたのよ、銀寿。そんなううで……」

不審な彼女の様子を指摘しようと口を開いたその時、見上げた先で銀寿が長くしなやかな人差し指を自身の口元へと当て、声を出さぬようになると言葉の続きをそつと制止した。

「ねねこちゃん。そのお茶は、私たちで頂きましよう。豹さんたちの邪魔をしたらお馬さんに蹴られてしましますわ」

いや、馬ではなく獅子かしら……。

などと言ひながら、銀寿は盆に載せられた二つの湯飲みのうち一つを自らの手に取ると、障子の影に身を半ばまで隠したまま、ずずつと香氣に茶を啜り始める。

「馬だの獅子だの、なんだつていうのよ」

寝込んでいる豹の元へ団子を持つて行つたは良いが、茶を添えのを忘れていたと、ねねこは盆に湯飲みを二つ載せ、再び縁側へと向かつていた。

あんなに青い顔をしていたのだ、飲み物もなしに団子など頬張つたら喉を詰まらせてしまうかもしないと急いでいる、ふともにもの何者かに前垂れの結び目を軽くちよいと引かれ、思わず足を止めながら、縁側の様子をひよいと覗き込んでみる。すると、

「……確かに、獅子が居るわね」

覗き見たその先で、相変わらず狛は呑具が悪そうにその身を横たえていたのだが、彼がいま頭を預けているのは銀寿の膝ではなく、獅子の化身である漣の膝であつた。

なるほど、確かに水を差すような眞似を仕出かせば馬——もどい、獅子に蹴られて怪我をしてしまふかもしれない。

「要するに、銀寿は漣に役目を取られちゃつたってワケね」

基本的には性別や年齢を問わず、獅月漣という男は誰に対してもそれなりに優しい男であるのだが、その中でも相棒の狛には特別な想い——要するに性別を越えた恋慕を抱いている為、そこの甘やかしよりは見てゐるこちらが思わず赤面してしまふ程だった。

た。

が、しかし。当の狛はというと、まさか同性から下心を向けられているとは知る由もなく、彼の好意を單なる親切と解釈をしてゐるらしく、その想いは今のところ報われてはいない。

見た目によらず、辛抱強い男だとねこは半ば呆れつつも、しばらく銀寿と共に茶を啜りながら、焦れつたい関係を保ち続け

ている一人の男の様子を不安げな面持ちで、そつと障子の影から観察し続けていたのであつた。